

良田平田遺跡

よしだひらたいせき

平成23年度の
発掘調査成果!

良田平田遺跡では、平安時代前半（9世紀～10世紀前半）の田畠の管理施設とみられる掘立柱建物群がみつかりました。また建物群の西と南を流れる溝の中から、木簡や多数の墨書土器、硯、古代の役人の銅製帯金具などが出土しました。



鳥取西道路の遺跡を掘る!

第35号 2012年3月23日



人と川との関わりは古く、鳥取西道路の調査では縄文時代や弥生時代の水利施設がみつかりました。当時の人々はどのように川と関わっていたのでしょうか。

水利施設の発展



高住井手添遺跡の川を塞ぐ丸太

高住井手添遺跡、本高弓ノ木遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代初め頃（約3000～2500年前）の川を、丸太で塞いだとみられる場所がみつかりました。水流を弱めたり水を溜めたりして利用していたようです。

弥生時代に米作りがはじまると、水田に水を引くため水利施設は重要さを増していき、横木と杭、樹皮を巧みに組み合わせた構造がみられるようになります（高住井手添遺跡の発掘調査成果を参照）。



本高弓ノ木遺跡の木製構造物

古墳時代には大規模な地域開発が行われるようになり、本高弓ノ木遺跡では古墳時代前期（約1600年前）に、川から水路へと水を引くため、大規模な木製構造物を設置したり土のうを積み上げたりするなど、水利施設はさらに複雑化していきました。

土のう積みなど新しい技術が取り入れられており、複雑だけでなく、技術も進歩していくことがわかります。



銅製の帯金具
(左) 巡方 (中) 丸鞆 (右) 鉈尾



わったいな！
わしらが残した
もんが、ごっつい
ようけ見つかっ
とるがな。



墨書土器「荒田大内」



古代の硯（円面硯）

古代因幡国の地名（高草郡刑部郷）、人名（孔王部廣公など）が記された木簡や、良田地域の古い地名である“荒田”が記された墨書土器も出土し、地域の歴史を明らかにするうえで貴重な発見となりました。



田畠の管理施設とみられる掘立柱建物



(財) 鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所
〒680-1133
鳥取市源太 12 番地
(旧鳥取湖陵高校美和分校内)
TEL : 0857-51-7553
FAX : 0857-51-7550
メールアドレス :
matsui@pref.tottori.jp

発掘通信

だんだんと暖かくなり、春の訪れを感じる日も増えてきました。今月号では今年度の発掘調査を振り返っていますが、ここには書ききれなかった成果もたくさんあります。これまでの発掘通信や現地説明会の資料などを財団のホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

高住平田遺跡

たかすみひらた いせき

平成23年度の
発掘調査成果!



昨年度に続いて行った調査で、奈良時代（約1300年前）以降の連続する3本の川や溝が見つかり、最近まで使われていた水路に受け継がれていたことがわかりました。

平安時代（約1100～1000年前）には川に堰をつくって川の水を利用したようで、近くからはそのころの土器が多く見つかりました。

鎌倉時代（約900年前）以降になると、このあたりは水田で米作りをしていたようで、当時の水田跡も確認することができました。



3本の川や溝は、一部で交差しながら並ぶように見つかりました。



平安時代の堰の一部には丸木と細い枝をつかった構造物がつくられていました。



川からみつかった平安時代の土器

奈良時代から平安時代の川からは、ほとんど割れていない土器が多く見つかりました。

高住牛輪谷遺跡

たかすみうしわだに いせき

平成23年度の
発掘調査成果!



遺構は中央の溝よりも丘陵側で多く見つかりました。溝は集落の境界として掘られたと考えられます。

弥生時代後期～古墳時代前期（約1800～1600年前）のムラの跡や、古代・中世の水田跡が見つかりました。縄文時代後期（約3500年前）の土器も出土しており、長い間この周辺が人々の生活の場となっていたことがわかってきました。

今回の調査では建物跡はみつかりませんでした。遺構や土器のあり方から、さらに丘陵側にムラの中心があったと考えられます。



土坑の中からみつかった甕（弥生時代中期終わり頃）。周辺では他にも大きな土器の破片が見つかり、近くに住居があった可能性があります。



高住井手添遺跡

たかすみいでそえ いせき

平成23年度の
発掘調査成果!



高住井手添遺跡の発掘調査では、縄文時代から弥生時代にかけての遺構・遺物を多量に確認し、5000年以上もの昔から人々が生活してきた遺跡であることがわかりました。

湖山池にそそぐ三山口川がつくり出した平野は、山や海の幸に恵まれ、弥生時代になって水田稲作が始まった後は、用水を引きやすい便利な土地であったことがわかります。

縄文時代中期（約5000年前）

遺跡の一角でたくさんの縄文土器が出土しました。周辺に住んでいた縄文人たちが残したものです。これらの土器とともに両端を打ち欠いた平らな川原石がたくさんみつかりました。これは魚をとる網などに用いたおもり（石錘）です。当時、波のおだやかな内湾だった湖山池の周辺は、縄文人にとって格好の漁場だったでしょう。



縄文時代晩期（約3000年前）



遺跡内を蛇行しながら流れる川がみつかりました。川の中からはたくさんの木材とともに、ヒゴやツルで編んだ「カゴ」が出土しました。美しく編まれたカゴからは、縄文人の高い工芸技術だけでなく、優れた芸術性が伝わってきます。

弥生時代中期（約2200～2100年前）

水路の中に設けられた堰や護岸施設とみられる木製構造物がたくさん見つかりました。

水田の開発には、利水や治水のために水路の整備を欠かすことはできません。これらの構造物は弥生人たちの知恵と、長年にわたる努力の結晶です。

